

降誕節第8主日礼拝説教要旨(3月8日)

『えにしだの木の下から』 早川 真牧師

列王記上 19章 1-13節

エリヤが休んだえにしだの木は荒れ野に生える二メートルに及ぶ木でありながら、マメ科でわずかしか葉がないためにわずかな木陰しか作れない植物であるようです。そのような貧しい場所で、しかしそこに神が天使を通して必要な糧を備えてくださることによってエリヤは再び力を取り戻し歩き出すことが出来ました。

私たちがどれほど人生に絶望し社会に絶望し自分自身に絶望したとしても、神はそこから再び立ち上がるために必要なものを与えることがおできになります。神は一本のえにしだの木の下から絶望して死を願ったエリヤを再び立ち上がらせ、ご自分の使命に歩ませられました。それは神だけがなせるところの救いでした。

そして神は私たちにも誰かにとってのえにしだの木になることを願っておられます。それはたとえほんのわずかであったとしても、それを隣人のためにささげるということです。人に与えるほどないのですという時も、ほんのわずかの木陰を通して、神がその人を救われます。それは一言の声をかけることかもしれません。わずかなものを差し出すことかもしれません。一言の祈りをささげることであるかもしれません。こんなわずかなものでは役に立たないと思うものも、神は私たちの悲観的な予想をはるかに超えてご自分の救いのために用いてくださいます。

そのようにして私たちはこの耐え難い地上の歩みを、神の救いの業に期待しながら、互いに祈り合い支え合って歩んで行きたいと思います。互いに一本のえにしだの木となり、どんな時も私たちを休ませ力づけてくださる十字架の下から、神の示される場所へと共に送り出されていきたいと思います。